

游今瀧山 (一)

令和四年五月七日学習 (担当 逸郎 正 弘幸)

原文

重九之日、本有「廣溪採蕈之約、不敢赴、而特拉友人中山太叔、姪盛、及門生一兩輩、入今瀧山、訪僧神宗草廬、乃相俱出廬、弄寒花、賞奇巖、望懸泉、觀紅葉、逍遙盤桓、惟隨神宗所誘、下溪、而立乎絕壁之下、或度嶺、而步乎縹渺之際、及行倦、則藉草班坐、論詩談禪、不覺夕陽已射前峰」矣、

読み

重九の日、本は廣谷に蕈きのこを採るの約あれど、敢て赴かず。而して、特友人中山太叔、姪の盛、及び門生一兩輩たつ拉れて、今瀧山に入り、僧の神宗の草廬を訪う。乃ち相俱ともどもに廬を出て、寒花を弄あそび、奇巖を賞で、懸泉を望み、紅葉を觀る。逍遙盤桓、惟神宗の誘う所に随い、溪を下り、絶壁の下に立つ。或いは嶺を度り、而して縹渺ひょうびょうの際を歩く。行くに倦うむに及んで、則ち草を籍しき坐を班け、詩を論じ禪を談ず。前峰に夕陽已に射すを覺えずかな、

訳

九月九日(弘化元(1844)年)、重陽の節句。もともとは、広谷できのこ狩りの予定であつたが、敢えて行かなかつた。ただ友人の中山太叔、甥の盛之助、塾生の一、二人を連れて今瀧山に入り、僧神宗の草庵を訪ねた。

しばらくして、共に庵を出た。咲いている花を楽しみ、大きな岩を眺め楽しみ、滝を眺め、紅葉を見た。そこらを気ままに歩き回り、れらを觀ながら歩き回り、ただ神宗の勧めに従い、溪に降りて絶壁の下に立った。

あるい峰を越え、広々とした所を歩く。行くことに疲れると、草を敷いて分かれて座り、詩のことを論じたり、禪のことを語り合つた。前の山に夕日がすでに射している事にも気づかなかつた。

言葉・註

重九ちゅうきゅう 九月九日(重陽の節句)

重九

蕈きのこ きのこ 特々タダ

一兩いちりやう 二

草廬そうろ 草庵

寒花① 冬に咲く花。

② 雪を冬の花に見立てていう語。

懸泉けんせん 瀧のこと

盤桓ばんかん

うろうろ歩き回ること

縹渺ひょうびょう

ひろくはてしない

班わ 分ける

しく